

# ベストセラーに けつまずくまで…



東江一紀

月産千枚なんて、やっぱりむちゃだった。いや、むちやを承知で、七か月七千枚の自主懲役刑に服したのだが、刑期内に仕上がったのは、やっと三千枚。達成率四割三分弱で、横浜ベイスターズの勝率にも及ばない。駒田の打率よりは上だけど、だからといって、わたしがベイスターズの五番を打てるわけでは

ない。シャネルの五番だつて無理だ。神楽坂『五十番』の肉饅なら、なんとかなる。などと、わけのわからんことを言っている場合ではない。七か月で六冊訳し終える予定が、まだ三冊残っていて、刑期の延長を重ねつつ、余罪を追及されているきょうこのごろなのである。

目いっぱい働いたんですけどねえ。

朝は小学生の娘といっしょに起きて、そそくさと舎房に出勤し、昼飯も晩飯も運んでもらって、ワープロの前で約十三時間。家に帰ると、アルコールを補給しながら、ラップトップ・ワープロの前でさらに三時間。充分に酩酊したところで、死んだように眠る。

そんな生活を、休みなしに七か月続けて、やっとこさノルマの四割強をこなしたつてわけで、わたし、もう限界です。

ときどき、頭が破裂するんじゃないかと思った。あまりに仕事が進まないんで、夜中にはっと目覚めて、冷や汗をびっしょりかいていることもあった。一度、ぎっくり腰をやつて、くそ忙しいのに整体に通つたりもした。市が無料でやってくれる健康診断を受けたら、コレステロール値が標準以下なのに、中性脂肪が標準上限の六倍あった。

やばい、やばい。これじゃ、過労死一直線だ。吉沢京子だ。あ、あれは『柔道一直線』か。「一条くん、頑張つて！」なんか言っちゃつてさ。うるせえ、頑張るもんか。わたしは一条直也ではない。桜木健一でもない。

なんだか、わたし、悪い夢にうなされていくようでありますが、とにかく、このまま青筋立てて働き続けていると、遠からずぷつんと切れてしまうだろう、という恐怖感を、何

度となく胸にいだいたのだった。

そんなわけで、まあ、立ち止まって休むほどの余裕はないけれど、あんまり焦らずに、なおかつペースをなるべく落とさずに、酸素を取り入れながら走り続けることにした。ほんと、酸欠はいけません。

今回の懲役生活でつくづくわかったけど、わたし、まったくもってスピードランナーの資質を欠いてますね。精進齋して臨めば、月に千枚ぐらいできる、いや、やらねばならぬ、と、気持ちだけは勇ましかったが、脚が全然ついていかなかった。

スピードもない、馬力もない、それを補う器用さもない。あるのは、一日十六時間労働を何か月も続けて、平気でいられるという鈍さだけ。要するに、わたし、人よりとろいのである。のろいのである。駿馬にはほど遠い、木馬並みのとろさ、木馬並みののろさ。つまりは、トロイの呪いの木馬ということである。なんのこっちゃ。

でもね、自己弁護するわけではないが、文芸翻訳の世界では、それもありませんかと思ふのだ。みんながみんな、才気煥発型じゃつまらないでしょう。そう、翻訳家はとろくってもいいの。のろくってもいいの。

トロ食って、エビ食って、ウニ食って、そいで、勘定を払う段になったら、トイレに身

をひそめていればいいの。

うらむ、今月は、常にも増して錯乱してるなあ。天皇賞は、サクランチトセオーを軸にしようかしらん。

しかし、なんでわたしが、錯乱するほど忙しく働かなくちゃなんなのかってことも、この際、書いておきたい。わたし、趣味でワーカーホリックをやっているわけじゃないの。仕事は好きだが、仕事と心中するつもりはない。毎度、毎度、「暇がないよお」って話でこのページを埋めていることに、忸怩たる思い（はじめて使ったぞ、この言葉）をしているのである。

まあ、ひと言で言えば、食えないってことですね。いえ、いえ、食欲がないという意味ではない。これぐらい働かないと、一家五人、暮らしていけないのだ。箸は十本、筆は一本、衆寡敵せず（はじめて使ったぞ、この言い回し）ってやつだな。

適当に訳書が刊行されて、ときどき雑誌に原稿が載っていたりすると、結構稼いでいるように見えるらしく、休みなく働かわたしに對して、「そんなに儲けてどうするんですか？」などと、心ない揶揄を浴びせてくる人たちがいる。

いや、悪気がないってことはわかってますが、わたし、とつてもくやしいです。

もともとが、文芸翻訳というのは食えない

商売で、わたしも、それぐらい覚悟して転落してきたのだが、このところ、「食えなさ」にどんどん磨きがかかっている。なにせ、翻訳書の初版部数が「半ころ」です。つまり、ひところの半分ってこと。

出版点数が、飽和状態を超えてもなお増え続け、従って、翻訳出版界全体は活況を呈しているように見えるのだが、一点ごとの部数は、当然、じりじりと減っていく。

単純に言って、数年前の生活レベルを維持するために、倍の仕事量をこなさないとけない計算になる。

安い、古い、狭い、公団の賃貸アパートに住むわたしの悲願は、「ひとりひと組の布団」である。うっかり子どもたちの勉強機を買ってしまったわが家には、三組の布団を敷くスペースしかなくて、そこに五人が無理やり寝ているという現状なんです。

そんな生活を脱却するために、まなじり決して働き続けるわたしの、どこが悪い！

でも、「脱却」はかなりむずかしい。「維持」すら危うくなってきた。ね、わたしとしては、ベストセラーにけつまずくまで、走り続けるしかないってことになる。

これじゃあ、しかし、「うだうだ・じめじめ」とほほ通信”だな。情けない。